

長英逃亡と和算家

山口正義

一、はじめに

「事実は小説よりも奇なり」といいますが、天保十年（一八三九）の蚕社の獄で永牢となり、牢屋敷の火災に乗じて脱獄、六年余りにわたり幕吏の追求を逃れて逃亡した当代随一の蘭学者高野長英（一八〇四〜五〇）の生涯は、まさに波乱に富んだ「小説よりも奇なり」でした。

この長英逃亡を裏で助けた内田弥太郎（五観）は、和算の歴史の最後を飾る大物でした。内田は「伊賀の者」といわれる家系の下級幕臣であり、そのことが長英逃亡とともに謎めいた印象を与えています。長英逃亡を調べると、内田にとっては敵方に属す人物ではないかと思われる人が門人であったりして、意外な人間関係に歴史は一面的ではないことを思い知らされます。

そして、嘉永三年（一八五〇）十月三十日、長英が幕吏に襲われ悲劇的な最期を迎えたあと、内田の甥の宮城信四郎は長英に住居を世話した罪で遠島の処分を受けますが、内田に対する処罰は何故ありませんでした。長英死亡後、内田は明治十五年に亡くなるまで、太陽暦改暦などの公的な役職を経験していますが寡黙であったといえます。長英との関わりが大きく影響したことは想像に難くありません。

二、蚕社の獄の概略

蚕社の獄とは天保十年に起きた政治疑獄事件で、目付鳥居耀蔵の告発により渡辺崋山・高野長英・小関三英ら西洋事情研究者の仲間「蚕学社中」が弾圧されました。幕府儒官林述斎の次男である鳥居は、幕臣が崋山らのもとに出入りすることに危機感を覚え、江戸湾岸の巡見を終えた代官江川太郎左衛門が崋山に復命書の別冊として西洋事情書の執筆を依頼したことを探知します。同書の上呈を阻止するため配下の小人目付小笠原貢蔵に探索を命じ、小笠原の報告に脚色を加え老中水野忠邦に上申。崋山と長英は逮捕され、押収された「慎機論」等によって崋山は国元蟄居、長英は「戊戌夢物語」著述により永牢、三英は逮捕前に自殺しました。長英の「蚕社遭厄小記」は天保十二年春に獄中で蚕社の経緯を書いたものですが、その中に、「瑞臯（長英の号）の門人に、御家人明屋敷番伊賀の者内田弥太郎・増上寺御霊屋領代官奥村喜三郎とて、天算数学に通じける者」とあります。内田、奥村の幕政での立場を示しています。

三、長英逃亡の概略

長英が牢屋敷の火災（非人栄蔵に放火させたという有力説があります）に乗じて脱獄したのは弘化元年（一八四四）六月三十日のことであり、入牢してから五年後です。

長英の逃亡ルートは必ずしも明確になっていませんが、『評伝高野長英』（鶴見著）などによると概略次のようなものです。

獄舎が火災になると人命を守るため囚人の「切はなし」が行われ、三日以内に牢屋敷に戻れば罪一等が減じられ、戻らなければ脱獄犯となる慣例がありました。

この三日間に長英は、大槻俊斎（蘭学者）、加藤宗俊（漢方医）らを訪ね、恐らく内田とも会って相談していることだろう。三日を過ぎると長英は脱獄犯の逃亡ということになり、板橋の門人宅やその実兄（高野隆仙）の浦和の家などに潜伏しながら上州に入ります。

長英は江戸で開塾以来上州出身の知人が多い。柳田鼎藏・福田宗禎・高橋景作などで、その関係者を頼って上州中之条で一年以上過ごしています。

その後直江津に出て、和算家小林惟孝(百喟)を訪ねています。百喟は長英の門人ではありませんが内田の門人であり、事前に内田から話を聞いていたのかも知れません。

弘化二年の末頃には郷里の水沢に行き母に会い、仙台、福島、米沢を経由して江戸に戻ったといわれますが詳細な逃亡ルートなどは不明です。

弘化三年晩春に江戸に戻った長英は麻布藪下に妻子とともに住みます。一時、相模足柄にも住み、内田から依頼された天文の翻訳書「星学略記」を著しています。弘化四年晩春に江戸に戻ると妻子と暮らしたり、内田の家に隠れたりして、「知彼一助」という国防上の論文を著しています。

嘉永元年(一八四八)四月二日、長英は四国の宇和島に着く。この宇和島行きは宇和島藩主伊達宗城(むねなり)の意を汲んだ家臣松根図書と内田弥太郎との協議で決められ、長英も内田の家で図書と会ったことでした。宇和島では家老桜田数馬の別荘に住み、伊東瑞溪と変名して藩士に蘭学を教えたり翻訳を行ったりしています。

嘉永二年三月、宇和島藩江戸屋敷から長英が宇和島に隠れていることが幕府に知られた旨の飛脚が届き、長英は宇和島を去ります。

その後八月に再び江戸に戻ることになります。このとき顔を焼いて人相を変えたとも言われています。江戸に戻った長英は医師沢三伯と変名して青山百人町に住みます。この時内田は、甥(実兄の子)の宮城信四郎に住居を世話させています。

嘉永三年三月頃には危険を感じて一時、下総の花香恭法のもとに身を寄せます。恭法は長英の門人ですが、その父親安精は内田の門人(藤田嘉言の門人でも)でした。

そして十月三十日夜、青山百人町の家を捕方に襲われ悲劇的な最後(自害したとも撲殺されたとも)を遂げます。時に四十七歳でした。

この逃亡劇でもわかるように、長英逃亡で内田の果たした役割は極めて大きいものでした。また、長英は獄中や逃亡中にも妻子に生活費を送っています。その送金は内田を介して送っていたといわれます。このように内田は長英の入獄から脱獄をへて死に至るまでの十一年間、長英の世話をしています。まるで「明屋敷番伊賀の者」の力を逃亡劇に發揮して捕縛側の情報を利用したのではないかとさえ思われます。



長英終焉の地(青山・善光寺)
(2014年8月)

十二月の幕府の長英と内田の甥に対する判決には、「高野長英御裁許書

嘉永三年十二月二十一日落着 百人頭牧野兵庫組同心小島助次郎地面内二忍ヒ罷在候存命ニ候ハ、死罪高野長英 遠嶋 宮城信四郎」とあります。長英に対しては改めて存命なら死罪とし、宮城信四郎は遠嶋とされています。これにより内田の実家は断絶することになりますが、内田に対する処罰はありませんでした(閉門百日)と書いてある資料もありますが出典は不明)。

四、内田弥太郎のこと

ここで改めて内田弥太郎(一八〇五〜八二)について述べたい。内田の和算に関する実績については『明治前日本数学史 第五卷』などに詳しいですが、内田の能力は天文・地理・測量・航海・蘭学などに及び、単なる和算家では括れない人物です。しかし、長英逃亡中や長英死亡後に何を感じて生きたかの資料は少ないようです。ネットで探してもこの大物人物の記事は驚くほど少ないのです。このことは逆に長英との関わりが深かったことを示しているのでしょうか。

内田弥太郎は幕臣宮城弥一郎の次男として生まれます。初め恭といい、のち観または五観。字は思敬、観齋と号し、宇宙堂とも。十一歳で日下誠(くさか)の門に入ります。この塾は高等数学専門で塵劫記を教えられる位で

ない入門はできないといわれていました。十六歳の時に大宮氷川神社に楯田の部分周長を求める算額を奉納(『古今算鑑』)しています。今の理系大学生レベルの問題です。また師の日下は十六歳の内田に關流宗統を継がせようとしています。この時は固辞されます。十八歳のときに關流宗統を引継ぎ、瑪得瑪第加(マテマチカ)数学塾を開いています。

日下は『古今算鑑』の跋で、「余が門人内田思敬は穎悟精敏、衆技に通曉し、あるいは礼楽にあるいは経史に議論して今古を論拠し、(略)またその天文曆術の詳しき、これを掌上に示すがごときなり。初めて数を我に学ぶとき、年甫十一、儕輩中、嶄然、すでにして頭角をあらわし、いまだ弱冠にしてその隱微をきわめ、遺すところあることなし。弟子の多くはこれを慕い、余もまた才子の門を出づをよるこぶ。ついに關氏宗統の訣をもつて、ことごとくこれに附属す。韓子曰く、弟子は必ずしも師にしかずんばならず、師は必ずしも弟子より賢らず。余、思敬にしてこれを知る」(出典は島野達雄氏のホームページ)と内田を誉めています。

二十二歳の時、内田家の家督を継ぎます。この内田家は既述のように明屋敷番伊賀の者です。二十三歳の時に同門の和田寧について円理斡術(多重積分)の伝を受け、これを発展させて多くの門人に伝えることとなります。二十七歳の時に蘭学を学ぶ為長英に入門し、二十八歳の時に『古今算鑑』を著し、三十歳の時に「日本高山直立一覽」を著して富士山の高さを3476.7mとしています。三十二歳の時に長英の「救荒二物考」の跋文を書き、三十五歳の時には蛮社の獄に關連する江戸湾測量を行っています。この時、鳥居耀蔵の告発状には内田弥太郎や奥村喜三郎の名がありますが責任は問われませんでした。

内田の著書には『古今算鑑』や『円理闡微表』五卷(円理の計算に必要な積分表)などがありますが、内田五観として弟子の名前で出版したものも多いようです。

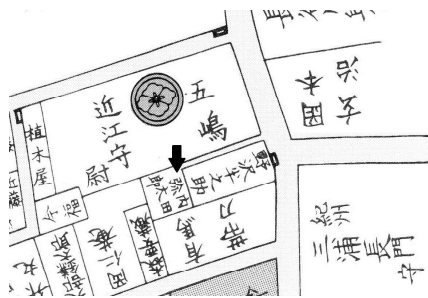
内田は早熟の天才であったが独創的な研究は少なかったとの評もあります。が、弟子を養う点では優れていました。門人は数百人に及ぶといひ、川北朝鄰、志野知卿、劍持章行、法道寺善などがいます。川越藩士の手島喜次郎清春(『演段参伍解』を著す)、宮沢熊五郎一利も内田の門人でした。

内田は事件ののち幕府の職を辞し、麻布で弟子に詳証学(数学)を教えていたといひますが、この後は二、三の和算書はあるものの、明治になるまで学術に關する主だったものは見つかりません。

明治二年に陰陽寮が廃止されて大学校天文曆道局が設置されると、天文曆道御用掛に任じられ星学局督務などを務め、太陽曆改曆作業の中心的存在でした。後に内務省で度量衡の統一に關わっています。東京学士会院(後の日本学士院)の創立時の会員でもあります。

内田の資料については『高野長英傳』(高野長運著)には、「長英は内田弥太郎の家に潜伏したることあって、(内田は)長英の筆に成れるものも多くを蔵して居たが、其の死に臨んで他事と共に此の長英筆のもの始末を門人の河北朝鄰氏に依頼し、河北氏は後年其の多くを著者(長運)の許へ返還された」とあります。返還されたものには前出の「星学略記」などがありますが、『高野長英傳』を見ても長英逃亡と内田を關連付けるものは見当たりません。長英からの書状や關係書類などが残っていないのは身の安全上から処分したのであるうことは容易に想像できます。

また内田の和算關係の蔵書は焼失しています。『増修日本数学史』の明治元年の項には「内田五観、江戸市中の兵火を避けんが為、蔵書数百巻を下総五井駅に移せり。会々近隣に火あり。蔵書悉く焼亡す」、嗚呼、天、奚ぞ数学書に災するかくの如く甚だしきや」とあります。何とも残念なことになりますが、このことも内田の心に大きな影を落としたに違いありません。寡黙になる一因だったかも知れません。



内田弥太郎の住居(矢印、肥前福江藩五嶋近江守の隣、現在の港区六本木5丁目)(東都麻布之絵圖文久元年)

五、その他の和算家(一)

奥村喜三郎は名は増勉ますのぶ、字は伯保、号は城山。暦算家・測量家でもあります。既述のように長英の「蛮社遭厄小記」には、「増上寺御霊屋領代官奥村喜三郎として天算数学に通じける者」とあります。蘭学を長英に、和算を丸山良玄・本多利明に、測量を伊能忠敬に学ぶ。

天保九年十月五日の尚齒会の例会に、内田と奥村は二人で制作した測量器具「経緯儀」を持参しました。鳥居耀蔵と平行して江戸湾見分を命じられた江川太郎左衛門が、崑山に測量技術者の推薦を依頼し、内田と奥村喜三郎を推挙したのが天保九年十二月、最初は勘定奉行によって許可されませんでした。後、水野忠邦の名で参加を認められ江戸を出発しましたが、鳥居の理不尽な抗議により奥村は途中から帰されています。奥村の『量地弧度算法』（天保七年）に内田の序文があります。『算法地方大成斥非問答』（天保八年、この書は秋田義一の『算法地方大成』を非難したものといわれます）、『経緯儀用法図説』（天保九年）、『廻船宝富久呂』（天保十年）、『算学必究』（天保十二年）などの著書があります。

小林惟孝こばやし（一八〇四〜八七）は通称嘉四郎、あるいは祐吉（祐介とも）。百喙ひゃつべ、牙籌堂がちゆうどうと号す。直江津今町の人で、内田に数学を学び、暦術を小出兼政に学んでいます。三度京都に出て算学、測量、陰陽暦法を学び高田藩の台場設置の測量、設計を行なう。土御門家からは奥義秘伝免許を受けたといえます。牙籌堂という塾を開いて多くの門人を育てました。長州征討・戊辰戦争に従軍し、その功により苗字帯刀・三人扶持大年寄格待遇を受け、さらに高百石を給せられたといえます。

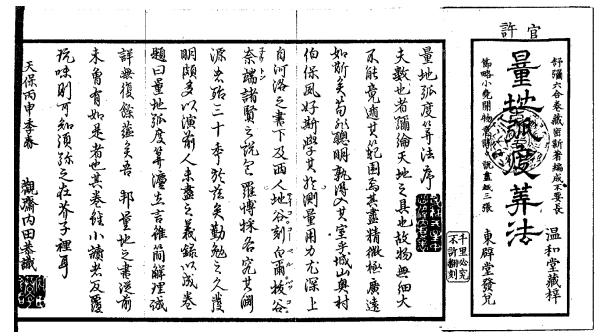
長英を匿ったのは内田との関係があったからで、内田からすれば信用に足る人物と評価してのことだったでしょう。

花香安精あなせい（一七八三〜一八四二）は下総香取郡関戸村（旧万歳村、現旭市）の名主で、藤田嘉言及び内田弥太郎の門人でした。安精は文化七年香取神宮に算額を奉納しています（『賽祠神算』）。また、文化十三年には関流天竄法三冊を著しています（三上義夫の「房総数学年表」）。さらに文政十三年には安精の門人が岩井不動へ算額を奉納しています。因みに千葉県に指定されている「房総数学文庫」は、安精とその一門が収集した和算関係の叢書です。

この安精の子（養子とも）が花香恭法で長英の門人でした。こういったことから長英は一時、恭法のもとに行った（逃れた）のでしょうか。長英は蘭仏辞典などを質にし、五両の金を借りて江戸に戻ってきています。なお、後述の剣持章行は天保十年十月に下総に遊歴教授を始めたときに、花香氏に「止宿」しています（十一月廿日と十二月四日、『和算家剣持章行の遊歴日記』（大竹茂雄））。恐らく安精と五月の「蛮社の獄」が話題になったことでしょう。またその後も天保十三年八月、十四年七月、十五年七月にも花香氏に止宿しています。安精は天保十三年五月に亡くなっていますから恭法との付き合いだったと思われるます。

林八千雄はやし（藤林八千雄）（一八二四〜七六）は高田藩の御殿医の四男の生まれ。初め小林百喙ひゃつべに学び弘化四年算法の奥義免許を受けます。嘉永元年脱藩して京都に福田理軒を訪ねています。理軒は八千雄に三日間に亘って試問を行ったといいますが八千雄は試問に悉く答え、理軒をして「予ニ於イテ教ユル所ナシ、海内唯、内田弥太郎アルノミ」と八千雄の習学を称え、「弥太郎氏ハ蘭学ヲ極メテ仰クベキモノアリ、宜シク就イテ研究スヘシト」と内田への推挙の労をとってくれたといえます（ホームページ「林八千雄は、幕末の隠れた志士！」より）。

林八千雄という名は和算関係の本には全く出て来ず、和算家としてどのような実績があるのか不明ですが、



奥村喜三郎の『量地弧度算法』（東北大）

このホームページの内容によれば後述のように、内田と密接な関係にあります。

六、その他の和算家（二）

劍持章行（一七九〇～一八七一）は上州沢渡の農家の出。板鼻の小野栄重に学び、文政十年に見・隠・伏の三題免許を与えられました。章行三十七歳の時でした。

天保十年の五十歳の時、内田の「瑪得瑪弟加塾」に入門します。壮年の頃より両毛、両総、常陸、武蔵の各地を遍歴して子弟の教育に努力しました。特に、常総には多くの子弟が育ち、劍持が末永く遊歴を行う土地になっていました。明治四年六月、北総の鐮木（千葉県旭市鐮木）において客死しました。級数、不定方程式、定積分表などで多くの工夫をこらしたといわれます。

著書に、『算法圓理冰積上下二卷』（天保八年序、本書の扉は岩井重遠閲、山口言信著となつていますが実際の著者は劍持であるといわれます）、『探蹟算法』（天保十一年序）、『算法開蘊』四卷（嘉永元年序）等の刊本があり、他に問題の解義書や草稿類も多いです。

『劍持章行と旅日記』（高橋大人）には「瑪得瑪弟加塾」入門に際してのことが概略次のように述べられています。

天保二年、医師福田宗禎は長英を沢渡に招聘して蘭学の教えを請うた。この時、宗禎は四一歳、長英は二八歳であった。蘭方医学は吾妻の地に定着し発展していった。福田宗禎のもとには柳田鼎蔵、高橋元貞、高橋景作、望月俊斎などが集まり、蘭方医学の研究が進められた。天保二年高橋景作は江戸へ出て長英の大観堂に入塾した。隣家の福田宗禎は章行の才能と向学心を見込んで出府を進めた。天保十年五月初旬、章行は家督を弟貞寿に譲って江戸に出て岩井重遠を介して白石長忠に入門した。これには、沢渡村が文政七年から清水卿の知行地となり、白石が清水卿家士であったことも関係しているとも言われている。

その後、長英の蘭学の弟子で和算家である幕府伊賀者内田弥太郎五観の瑪得瑪弟加塾に入門。内田への入門は福田宗禎から長英を介してなされたのであろう。それにしても五月十四日には「蚕社の獄」により、渡辺華山が捕えられ、一旦身を隠した長英も十八日には北町奉行所に自首して、獄に繋がれることになる。このような長英の身辺の慌ただしさの中で、果たして章行の瑪得瑪弟加塾入門の橋渡しができるものだろうか。

果たしてこれを裏付けるかのように劍持の「旅中日記」の天保十年五月の個所には次のようになっています（『和算家劍持章行の遊歴日記』（大竹茂雄））。

三日白石氏へ出、金百疋扇子一对代百廿四文土産

五日高野氏へ出、菓子料金老朱進上、江戸住居いたし度旨咄いたし候処、高野氏より内田氏へ書状遣シ呉レ候而、内田ニ先者住居之筈ニ相成、其次日邑樂屋帰り宿代勘定いたし内田へ引越シ申候

（この後は何故か九月廿四日になつています）

さらに続けて『劍持章行と旅日記』は次のように述べています。



劍持章行先生碑（千葉県旭市鐮木）
(2015年9月)

瑪得瑪弟加塾での修学中の様子を示す福田宗禎から劍持宛の書簡が残されている。蛭社の獄後の五月晦日、長英等の様子を福田宗禎に知らせた書状に対し、福田から劍持に宛てたものである。

五月晦日の御簡六月十日達し、御出府御平安之趣承知仕候、大慶不斜候、平年方ハ暑氣も酷敷殊ニ久敷降雨も無之候、嘸々御府内ハ嚴敷暑氣と奉察候、御保護專一二奉存候、御家内一統無事ニ御座候、御降心可被下候、此節ハ内田氏ニ御寄宿之由、承知仕候、高野一条被仰聞候、其前いせ町秀造帰府華山、高野子之事件 承知罷有候、扱々高野子薄命之人ニ御座候、可哀事ニ候、全体高野子外国之事を言出候て毎度噪々敷候故、前年度々異見支加へ候得共、不取用、此度困厄ニ及候趣き、自ら招き候禍ニ御座候、讒者之口も可止候得共、平素外寇等之事も言出、自も驚き人をも愕然為致候狂噪家故拙老方毎時諫言相加候事ニ御座候、ケ様成行候事可羅羅伺事ニ御座候、慎而自己之医事而已精究候ハゞ、何ぞ入牢之患可有之哉、医事ニも不關係夢物語など、編出シ、ケ様御上方疑を蒙り候事、多言多負之語を不守故ニ候、内田君ハ高野氏と交り候人々之間、追々高野之様子も相分り可申候間、御聞被遊候て御しらせ可被下奉希上候、大兄御出都ニ候てハ先退屈無之、御精研被遊候て交遊之中人物を撰ミ信義を御尽シ御交り可被成候、必其中ニハ有益之人可有之候、先急ニ事を不求方宜敷可有之候、大器晚成之語、御互ニ可被成候、何事も後音縷々可申上候、時下御保愛專一二奉存候、章齋方も宜敷御致音申上度申上候、

早々頓首

六月十九日

浩齋 宣

劍持要七雅兄 坐下

この書状によれば「高野子薄命之人ニ御座候、可哀事ニ候」と哀れみを以て書いています。また「前年度々異見支加へ候得共、不取用」ともあり、「此度困厄ニ及候趣き、自ら招き候禍ニ御座候」、「医事ニも不關係夢物語など編出シ、ケ様御上方疑を蒙り候事、多言多負之語を不守故ニ候」と言い切っているなど可なり長英に対して批判的のようです。

なお、因みに劍持の北武蔵周辺の人々には、戸根木格齋（熊谷）、明野栄章（熊谷）、金井欄共（本庄）、船戸吾兵衛（嵐山）、内田祐五郎（嵐山）らがいます。これらの内、金井は天保年間に劍持から教えを受けており、蛭社の獄について話を聞いているかも知れません。他の門人達が劍持から教えを受けたのは少し時代を下った頃です。

七、意外な人間関係

蛭社の獄と長英逃亡を調べて行くと、意外な人間関係に驚きます。歴史は決して一面的ではないのです。その例を次に挙げます。

①内田弥太郎は長英の長女「もと」を養女としていました。長英の死亡した後、「もと」はどうなったのか、内田はどう行動したのか、その資料は全く不明です。不思議です。

②老中水野忠邦が江戸湾防備のために、江川太郎左衛門と鳥居耀藏に調査を命じました。江川側の測量技師は内田弥太郎で、鳥居側の測量技師は小笠原貢藏でした。その貢藏の養子甫三郎は内田弥太郎・奥村喜三郎に師事して蘭学を学んでいますし、佐久間象山と交流しています（横浜開港資料館）。

そして、その甫三郎は、江川側測量技師として参加しようとした時に鳥居耀藏のクレームにより帰府を余儀なくされた奥村喜三郎の甥にあたります。甫三郎が貢藏の養子になったのは天保十三年で、家督相続は弘化三年のことでした。

③蛭社の獄の摘発役人の小笠原貢藏の養女と花井虎一は縁組みをしています。つまり貢藏と虎一は親子に

なっています（天保十三年）。花井虎一は宇多川燗庵に蘭学を学ぶし、崑山とも交遊があります。その虎一は事実無根の「無人島渡航計画」をでっち上げ、いわば密告のような形で崑山は逮捕されています。北町奉行の大草高好は訊問の際、崑山に、「その方、意趣遺恨にても受け候者これありや」と問うています。奉行大草高好はねつ造を感じ取っていたのかも知れません。

④林八千雄は福田理軒の紹介で内田弥太郎の門弟になります。その後八千雄は内田の女婿になっています。つまり内田の娘と結婚しているのです。その子供は「藤」という名でした。八千雄が弥太郎の娘と別離するとき、内田は「藤ハ余ノ膝下ニオイテ育セント熟規庭訓如何トモスルヲ不能、生子ハ過慮スル勿レ」と八千雄に云い、互いに涙に咽んで別れた。そして、内田の推挙でこの後、八千雄は大塚同庵の門弟となります。（ホームページ「林八千雄は、幕末の隠れた志士！」より）
意外な人間関係が続くのです。

八、再び内田弥太郎

既述のように、長英の逃亡を手助けした内田弥太郎の咎めはありませんでした。何故処分がなかったのか謎ですが、次のような資料を見つけることが出来ました。

①既述の林八千雄について述べた資料には、継嗣の桑原雄造に長英死亡の時のことを次のように書き残したとあります。

「長英自刃ヲ聞ク有リ先生落胆 始テ其ノ実ヲ明ス 三伯ハ長英ナリ今潜匿発覚ス」と書き、更に、「予子弟ノ因止ヲ得スト雖モ隠匿ノ罪遁ヘカラス」、「塾生聞皆逃去ス百郎一人止テ保護シ訟廷ノ事一切引負師ハ疾病起能ハスニテ代出ス」と続きます。

八千雄は、心労の余り病に伏した師の危機を救うべく、師に代わって訟廷に出頭して奔走しました。奔走の効あって師の取調べを回避して内田弥太郎の罪は閉門百日という軽い処罰で済んだというのです。林八千雄、二十六歳の時です（因みに内田は四十五歳でした）。

また、八千雄は「門弟は皆、関わり恐れて逃げ去ったが、百郎（八千雄）が一人止まって病気の師を保護し、訟廷の一切を処理してこれを解決した」と書き残しているといえます。

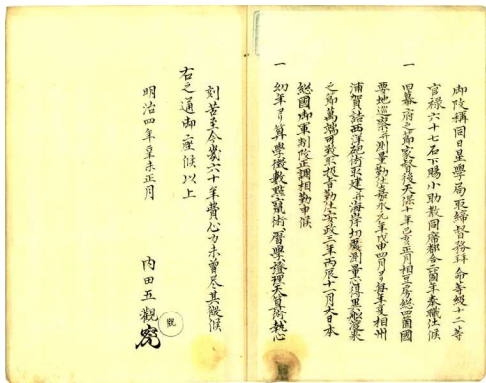
ここには、「師に代わって訟廷に出頭して奔走した」とありますが、二十六歳の若さでどの様に活動、弁術したのか、そしてそのことによる効果で咎めがなかったのかは不明でもあります。

「八千雄は内田を救うために榊原藩（高田藩）を説得して幕府の上層部、担当者をかしたのではないか」、「内田弥太郎が伊賀者同心であったことも、その追求の厳しさを免れる要因であったかもしれない」とこの資料はいうのですが…。

②『文明開化の数学と物理』（蟹江幸博・並木雅俊著）には、内田が咎めを受けなかったことに関して、「長英の長女を養女としていたことからしても不思議である。大久保一翁や崑山とも親しかった川路聖謨や江川英龍などの幕府開明派からの信頼が厚かったおかげなのだろう」と述べています。

なお、内田が明治政府の星学局御用係に採用された時の「拝命之記」（明治四年正月、国立天文台所蔵）によれば次のようになっています。

旧幕府之節家督後天保十年己亥正月相豆腐総四箇國
要地巡察并測量勤仕嘉永元年戊申四月ヨリ毎年夏相州



「拝命之記」（国立天文台）

浦賀詰西洋砲術取建并海岸切處測量心得異舩渡来
之節萬端可致取扱旨勤仕安政三年丙辰十一月大日本
総國御軍制改正調相勤申候

嘉永元年より毎年「相州浦賀詰」とありますが、長英死亡で幕府の職を辞しているとの資料もありませんからそれに従えば、改めて安政三年に「御軍制改正調相勤」となったということでしょう。長英死亡から六年後のことであり、長英逃亡の責任はやはり問われなかったように思われます。なかなか複雑です。(年表省略)

参考文献 (既述資料は除く)

- (1) 高野長運 『高野長英傳』 岩波書店、昭和47年
- (2) 鶴見俊輔 『評伝高野長英』 藤原書店、2007年
- (3) 蟹江幸博 『文明開化の数学と物理』 岩波書店、
- (4) 高橋大人 『和算家剣持章行と旅日記』 平成11年
- (5) 大竹茂雄 『和算家剣持章行の遊歴日記』 平成25年
その他

「やまぶき」11～13号(平成二十六年八～九月)